

# もぐら

1998年オリジナルバージョン

## 矢月秀作



### 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

#### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉ページの書影は1998年6月に刊行された  
オリジナルバージョン版です。装丁・桜庭文一氏

目次

プロローグ

7

第一章 野獣の履歴

13

第二章 新たなる悪夢

54

第三章 消えた依頼人

88

第四章 蠢く影

125

第五章 激動

160

第六章 悪夢の終焉

201

エピローグ

234

熱量の正体

237



# もぐら

1998年オリジナルバージョン



## プロローグ

「ここに間違いないな」

「はい。このビルの五階です」

市田は言った。

この辺は、白根組のシマだな……。

影野竜司は朽ち果てそうなビルを見上げた。

池袋の南側。駅から少し離れたところにある寂

れた路地の一角に、そのビルはあった。

周りには小さな飲み屋が点々としていた。けれど、人影はない。電柱の陰では、野良猫がポリバケツをひっくり返し、残飯をあさっていた。暑さのせいで、路地全体に、むせ返るような異臭が漂っている。

「ここで待ってろ」

竜司は言うのと、狭い階段をゆっくりと上がり始めた。

各階にドアは一枚しかなかった。塗装が剥がれ、錆びついたドアに、申し訳程度の店名が書かれている。どの階の店もそうだった。

典型的なぼったくりビルか——。

竜司は、五階の店の前で立ち止まり、ドアノブに手を伸ばした。自分の家にも入るようにドアを開け、中に踏みこむ。クーラーで冷えた空気が、汗ばんだ竜司の肌をさらった。

店内は薄暗く、カウンターしかなかった。ボックスを置けるスペースもあるが、何も手を加えていない。サイドボードに並んでいるウイスキーは、二、三本。カウンターにあるのは飾りの空き瓶。店と呼ぶには、あまりにお粗末だった。

「なんだよ、てめえ」

入口近くにいた金髪男が、フラッと立ちあがり、竜司を睨んだ。

「この責任者はどいつだ？」

竜司はぐるっと店内を見た。三人の男と一人の女の子がいる。

「俺だが、何か用か？」

一番奥に座っていた男が顔を上げて、竜司を見る。髪はオールバック。グレーのラメ入りスーツを着ている。老けて見えるが、竜司よりは若そうだった。

「金を返してもらいたい」

「なんだと？」

オールバックの男が気色ばむ。

「一週間前、ここへ連れ込んだ中年サラリーマンからせしめた十二万だ。返せば、おとなしく帰ってやるよ」

「帰ってやるだと？」

オールバックの男が、鼻で笑った。

「帰らせてくださいの間違いじゃねえか？ なあ」

「何様のつもりなんだよ、てめえはよ！」  
中ほどに座っていた長髪の男も、いきり立って大声を出した。

けれど、竜司は顔色一つ変えない。

「やっぱり、おまえらみたいなダニは、口で言ってもわからないようだな」

「わからなかったら、どうするんだよ！」

手前にいた金髪男が、竜司の胸倉をつかんだ。

瞬間、竜司は金髪男の胸倉をつかみ返し、頭突きをかました。

金髪男の鼻柱が歪んだ。竜司は、怯む男に何発も頭突きをかました。頭蓋骨が鈍い音を立て、頬骨や歯を砕く。

不意を突かれた金髪男は、抵抗できず、顔面に

頭突きを受け続けた。

「がっ……あぐ……」

呻うめきが小さくなつて、ようやく竜司は頭突きをやめた。胸倉から手を離す。顔面を真っ赤に染めた金髪男は、カウンターに背もたれ、ズルズルと崩れ落ちた。

「てめえ……素人じゃねえな」

余裕を見せていたオールバックの男の顔から、笑みが消えた。

「おい、殺やつちまえ」

命令された長髪男は、立ち上がりざまナイフを出した。

ストツパーを外すと、鋭い刃が飛び出てきた。

スポットを浴びた切っ先が、鈍い輝きを放つ。

「そんなモン、しまえ。でないど、こつちも本気で行くぞ」

「来てみろよ！」

長髪男は、竜司を見据え、ナイフを突き出してきた。

竜司は、自分から体を前へ押し出した。身をよじって切っ先をかわす。すばやく男の右腕を取った竜司は、男の肘を腕に挟んだ。

力を入れる。鈍い音がした。

「あぎゃあああつ！」

長髪男の手から、ナイフがこぼれた。右肘が、関節とは逆方向に折れ曲がっている。

一瞬のことだった。隣で争いを眺めていた女の子は、奇妙に曲がった腕を見て蒼ざめ、オールバック男の後ろに隠れた。

長髪男は、腕を押さえて、転げ回った。竜司は男の背中を踏みつけると、折れた右肘を容赦なく踏み潰した。

「ぎゃあああつ！ あつ、ひいいい……あああ……」

長髪男は、あまりの痛みに悲鳴を上げた。それでも、竜司は男の右腕の骨が粉々になるまで、踏み続けた。

やがて長髪男は、激痛に耐え兼ねて、気を失った。

その容赦ないやり方を見て、オールバックの男はこめかみに冷や汗を浮かべていた。

「どうした。金返す気になったか？」

「てめえ……。こんなことして、ただで済むと思つてんのか。俺は——」

「白根のチンピラだろ？」

「どうして……!」

「言つとくがな。俺は、ヤクザなど怖くない。来るなら来い。組ごと潰してやるぞ」

「ちくしょう、ナメやがつて!」

オールバック男は、懐に手を入れた。スーツがめくれた瞬間に、拳銃のグリップが見える。

竜司は男に駆け寄った。男が銃を抜く。そして自動拳銃のスライドを滑らせた。そこをすかさず右手で握り締める。スライドは、後ろに飛び出たままになっていた。

「自動拳銃は、スライドを戻さなければ意味がないんだ」

竜司は言つて、空いた左拳を男の顔面に見舞った。

「はぐぐつ!」

拳が鼻下を捉える。前歯が砕け、男の口元がへこんだ。口からダラダラと血が溢れ出す。

竜司は拳銃を奪い取り、スライドを戻すと、銃身を男の口の中に突っ込んだ。男の顔が、恐怖に強ばった。

「金を返すか、頭を飛ばすか。どっちがいい？」

竜司は静かに訊いた。

男は目尻を引きつらせながら、ポケットの財布

を出した。カウンターに置く。竜司は左手で札入  
れを開けてみた。中には、軽く三十枚の一万円札  
が詰まっている。

竜司は札を抜き出した。すると、小さなビニ  
ルの包みも一緒に出てきた。金をポケットに突っ  
込み、包みを摘み上げる。中には、白い塊かたまりが入  
っていた。

パケか……。

「おまえ、腕、見せてみる」

竜司は、壁の端でうずくまっている女の子を睨  
み据えた。

女の子は、震えながら両腕を出す。肘裏には、  
青紫色のアザが点々としていた。

「バカやろうが。シャブなんかに手を出しやがっ  
て……」

竜司は、男の口深くに銃身を押しこんだ。

「おごっ……うげげえ……」

男は苦しそうな呻きを洩らした。

「白根に言っとけ。今度、俺の目が届くところで  
シャブ売ってやがったら、容赦なく潰すとな」

竜司は銃を口から抜いた。そして、カウンター  
の奥に向け、銃を放った。

「ひ、ひいいいっ！」

オールバックの男は、頭を抱えて悲鳴を上げた。

銃声が店内に響き、硝煙の臭いがたちこめる。  
砕けたガラスが飛び散り、激しい音に包まれる。

銃弾を撃ち尽くした竜司は、マガジンを足下に  
落とし、銃をカウンターの奥に投げ捨てた。男は、  
イスから崩れ落ちて、震えながら、女の子の横に  
うずくまった。

竜司は、女の子の腕をつかんで立たせた。

「な、何するの……」

「一緒に来い」

「いやっ！ 放して！」

女の子は暴れる。竜司は、女の子の鳩尾みぞおちに拳を叩きこんだ。

女の子が息を詰めた。そのまま、ふっと気を失う。竜司は、崩れそうになる女の子の腕を握って支えた。そして、床に座りこんでいる男の顔面に、右踵かかとを叩きこむ。残っていた下前歯も折れ、口から流れ出す血は止まらなくなった。

「て、てめえ、誰なんだ……」

「誰でもいいだろ」

「おまえ、ひよつとして、もぐら……」

男が、そうつぶやく。

竜司は男の言葉に答えず、女の子を抱え上げ、店を出た。

## 第一章 野獣の履歴

### 1

「昨日、君が連れてきた女の子は、専門病院に入院させた。何年も使っていたわけじゃないから、三ヶ月もすれば、元の体に戻るだろう」

「身元は？」

「浅井和実、十七歳。昭立大学附属清流高校の二年生」

「清流高校というと、九段にある名門進学校の？」

「そうだ。父親は、大手商社の重役。過去に非行

歴もなく、学校でも家でも、ごく普通の女子高生だったそうだ。まったく……わからない世の中になつたもんだな」

瀬田はイスに深く背もたれると、大きなため息を吐いた。

「白根組のほうは？」

「君の情報は、昨晚のうちに所轄署の担当官に報告しておいた。今ごろ、組事務所に入りが入っている頃だろう。しかし、君も派手にやってくれたもんだな。負傷者三名、うち重傷者二名。店内から発見された弾丸は十四発。もう少し、おとなしくやれんものかね？」

「性分なもんで」

「相変わらずだな。所轄署を抑えるのに苦労したぞ」

瀬田は、小さく苦笑<sup>わら</sup>った。

竜司は、警視庁本庁の刑事局長室へ来ていた。

というより、無理やり呼び出されたのだが。

瀬田登志男刑事局長は、元特捜本部長で、竜司の元上司でもある。今でこそ、デスクに張りついて指揮しているが、十年前は特捜の鬼と恐れられた人物だった。

そんな瀬田を、一線から外してしまった責任は、竜司にある――。

「なあ、影野。そろそろ戻ってこないか？」

「……………」

「あれから、もう十年になる。君は十分すぎるほど、罪を償った。君が戻ってくるつもりなら、いつでも迎えることはできる」

「瀬田さん。せっかくですが……………」

「今の世の中、犯罪はより巧妙かつ凶悪化している。いまこそ、君のような人間の力が必要なときなんだ」

「瀬田さん。俺はもう死んだ人間です。買いかぶ

らないでください」

竜司は言うど、席を立つ。

「君はそれでいいのか」

瀬田が、竜司の背中に声をかけた。

竜司は、少しか振り向いて、口辺に笑みを浮かべた。

「今の生活に満足してますから」

そっけなくそう言い、局長室のドアノブを握ろうとした。竜司がノブをつかむ前に、ドアが開けられる。目の前にいたのは、特捜部の垣崎徹だった。

垣崎は、竜司の前をふさぐ格好で立っていた。

竜司は、垣崎を退かそうと、目を見据えながら、肩に手をかけた。垣崎が、竜司を見返し、手首を握る。力を入れるが、竜司の手はビクともしなかった。

竜司はフツと微笑んで、垣崎の肩を軽く叩いた。

「血の気が多いな。もうちょっと、肩の力を抜いておけ。命取りになるぞ」

竜司は、垣崎の肩をポンと叩くと、脇を擦り抜け、部屋の外へ出ていった。

垣崎は、竜司に背中を押されたように中へ入った。後ろを見ながら、垣崎は瀬田のデスクに近づいた。

「局長。麻薬を密売していたイラン人グループのトップの内偵が完了しました」

言いながら、資料をデスクに置く。

「ご苦勞。検拳に着手してくれ。時機は君の判断に任せる」

「わかりました。……局長。今の男は誰ですか？」

「あれが影野竜司だ」

「影野？ ひよっとして、十年前、一人で密売組織を壊滅させたという元特捜の？」

「そうだ」

「あれが、影野竜司さんか……」

垣崎は、ドア口に残った竜司の残像をなんとなく見つめていた。

新宿区百人町。大久保駅周辺に広がるこの街には、狭い路地に古い家並みとラブホテルが同居している。

路上には、外国人がひしめき、ちょっとした人種の坩堝るっぼを形成している。

竜司は、大久保通り沿いの路地を入ったところにある廃屋のような事務所に住んでいた。

隣には、今にも崩れそうな小さなアパートがある。そこにも、いろんな人間が住んでいる。フラフラして何をしているのかわからない学生風の男。場末で体を売るホステス。料理店で働く不法入国

の出稼ぎ労働者——。

どこを見ても、泥臭い人間が密集している場所だった。

「竜司さん、今、帰り？」

隣のアパートのホステス・ミチが、顔を出した。

はつきりとした歳は知らないが、もう、四十半ばは過ぎてているだろう。安っぽいワンピースを着て、顔を白く塗りたくり、でっぷりとした下腹をボリボリかきながら、歩いている。

「あんたこそ、今日は早いじゃないか」

まだ、昼の一時。彼女が出かけるのは、いつも夕方だった。

「デートしてくれって言うバカがいるのよ。まあ、不景気だからね。そういうサービスもしとかなないとね」

「ご苦労なことだな」

「そうそう。今度、うちの二階の外国人に注意し

てくれない？ お香をたくのはいいんだけどさあ、洋服を干してるときはやめてほしいって。妙な匂いがついちゃうのよね。こっちも、一応、色気が商売だからさあ。お香臭くちややってらんないでしょ」

「仕事なら、受けてやるよ」

「お金取ろうっていうの？ いいじゃない。私と竜司さんの仲なんだしさあ。今度、お相手してあげるから」

「不自由しちやいないよ」

「まっ！ どういう意味？ 失礼ね！」

「悪い、悪い。近いうちに特別、タダで言っといてやるよ」

「よかった。お願いね」

ミチは言うのと、趣味の悪いバッグを振り回しながら、大通りへ消えていった。

竜司は、苦笑しながら、事務所兼住まいのドア

のカギを開けた。煮えたぎった空気が、ムンと顔をさらう。汗がドツと噴き出す。

部屋の中には、たいしたものもなかった。

拾ってきたデスクとイス。来客用とベッドを兼用しているソファ。服は置きっぱなしにされていたファイルケースに突っ込んである。

デスクの上には、請け負った仕事の資料が雑然と積み上げられている。そして、電話が一台、ポツンと置かれているだけ。

竜司は、やはりゴミ捨て場から持ち帰った冷蔵庫の扉を開けて、缶ビールを取り出した。プルを開け、ビールを喉に流しこみながら、デスクに近づく。

留守番電話のランプがついていた。竜司は、ボタンを押して、イスに腰を下ろした。発信音のあとにメッセージが流れてくる。

《ヤクザの車にぶつけてしまって、法外な修理代

を請求されてます。どうしたらいいんでしょう》

若い男の声だった。連絡先を吹きこんだメッセージが終わると、また、次のメッセージが流れる。《バーで出会った女と勢いで寝てしまったんですが、それがヤクザの女で……。助けてください！》

今度は、中年男の声だった。

《ストーカーに付きまとわれてるんです。何とかしてください！》

怯えた女性の声も飛びこんでくる。

まったく、どうしようもない連中ばかりだな。思いながら、竜司はメッセージに入っている連絡先を、メモに書き込んでいく。

竜司の仕事は、トラブルシューターだった。警察がなかなか相手にしてくれない小さな事件や人に言えないトラブルを、自己流で処理する。

市田に頼まれたのも仕事だった。竜司が乗りこんだ店で、十二万もの金を取られたと泣きついて

きた。

十二万といえは、家庭持ちのサラリーマンにとつては大金だ。竜司は、しょうがないと思いいながら引き受けた。

金額の問題じゃない。トラブルの大小では判断しない。ケチな悪さで稼いでいる連中が許せないだけだ。

ただ、この仕事を続けていると、嫌になるときもある。自分からまいた種で、トラブッている連中も多い。

そんな連中は、仕置きの意味もこめて、放つておいてもいいのだが――。

「戻ってこいか……」

竜司は、瀬田の言葉を思い出す。けれど、すぐ首を小さく横に振って、ビールをあおった。

俺はあの事件で、終わったんだ……。

目を閉じると、いつでも十年前の記憶がよみが

えつてくる。

## 2

「影野、宇田桐。君たちには、志道会に潜入してもらおう」

十年前。当時、警視庁特捜部を仕切っていた瀬田のこの一言が、竜司の運命を大きく変えた。

竜司は、二十七歳。同期の宇田桐善康とともに、特捜の実働部隊として、体を張って犯罪捜査に当たっていた。

志道会というのは当時、新宿、渋谷、池袋といった首都圏の拠点となる地域を牛耳っていた暴力団だ。

特捜は、彼らの麻薬密売の実態をつかんでいたが、どうしても中枢にたどり着くことができなかつた。

そこで、特捜本部は、苦渋の策として潜入捜査を選んだ。

竜司は、家庭を持っていた。妻の美雪。そして、五歳になる娘・亜也。小さなマンションでの暮らしだったが、竜司にとって、家族はいつでも支えとなっていた。

美雪は、竜司が何時に帰ってきてても、起き上がって、相手をしてくれた。

わずかな時間でも、美雪の笑顔に触れると、張りつめっぱなしの竜司の神経が癒された。

潜入捜査前日も、深夜に帰ってきた竜司に気づき、起き上がってきた。

「お帰りなさい。お疲れさま」

美雪は、いつものように、竜司の着ているスーツの上着を脱がそうとする。

「今日はいい。またすぐ、本庁に戻らなきゃならない。明日から、潜入捜査が始まる。しばらく家に帰れないと思うが、頼んだぞ」

「わかってる。いつものことですよ」  
美雪は、にっこりと微笑む。

警官の妻は、毎日、夫のことを気づかっている。警官なんて、いつ何が起こってもおかしくない。朝は元気でも、夜には冷たい体になって戻ってくる……という事態も、不思議ではない世界だ。

いつも、夫の安否を心配しながら過ごす毎日、不安なはず。だが美雪は一度も、不安げな表情を見せたことがない。

その心遣いが、竜司にはうれしい。美雪がしっかりと家を守ってくれていると思うからこそ、仕事に専念できる。

「無茶しないでね」

「人を猛獣のように言うなよ」

竜司は苦笑した。

竜司は、二、三日分の着替えをバッグに詰め込むと、子供部屋を覗いた。娘の亜也は、父親が帰ってきたことも知らず、寢息を立てている。

竜司は、娘の顔を目に焼きつけた。

「じゃあ、行ってくる。あとは頼んだぞ」

「はい。行ってらっしゃい」

美雪は、竜司を笑顔で送り出した。

「別れの挨拶は済んだのか？」

本庁に戻ると、先に戻ってきていた宇田桐が、ニヤつきながら竜司に言ってきた。

「縁起でもないこと言うなよ」

「家族を持つと大変だな」

「家庭もいいぞ。待ってくれてる人がいると思うと、簡単に殺られるわけにはいかないからな」

「おまえには、そのぐらいの抑制力が必要だよ。

でないと、何をしてくすかわかったもんじやない」

「そりゃないぜ」

言って、竜司は笑う。

「まあ、俺には家庭は必要ないな」

「一生、独身を通すつもりなのか？」

「この仕事を続ける限りはな」

宇田桐が言う。

竜司と宇田桐は同期で、仲もよかった。仕事が終わると、独身の宇田桐を家に呼んで、一緒に食事をしたり、竜司が帰れないときは、家族の様子を宇田桐に見てもらったりもしていた。

真面目で慎重な宇田桐のほうが家庭を持って、何かといえはついで、突っ走ってしまう竜司が独身——というほうが自然のような気もする。

けれど、冷静に考えれば、いつでも危険と隣り

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。